
たったひとつ

楓和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たったひとつ

【コード】

N5036M

【作者名】

楓和

【あらすじ】

この小説を書いたのは模試の問題をもっと深くやってみたいなと思ったので。

なので、あらすじをいうと話が終わっちゃいます（笑）

文君は幼いながらも美しく、優しい娘であった。

求婚も『どんな方かもわからない方と交わりたくない』と男性と親しく交際することもなく宮中にいた。

「姫様、文が届いております」

「若桜、どなたから？」

「いつもの少将様です」

「また、あの方なの。」

一回きつぱり言って差し上げればいいのかしら
幼女趣味はたいがいにしてくれないかしら、と

「姫様、あまり目立たぬ方が宜しいと」

「・・・そうね、父様は悪くないものね」

若桜は文台を眺めながら、世間話をするようにいった。

「姫様だって、興味はありなのでしょう？」

ほら、こんなに恋愛ものばかりで」

「きゃああつ！こ、これは、その、そ・・・そう！社会勉強よ！」

「くすくす、分かりましたわ姫様。では」

若桜の気配が遠のいたことを確認すると

文君は肩の力を抜いた。

「はあー。私だって、相手さえ見つければ・・・」

相如という顔立ちは艶やかで美しい若い男がいた。

「ふー、今日の仕事は今夜ので終わりかな」

今夜の饗宴の練習をしようと相如は腰掛けた。

この男は趣きを感じた時に感じたまま、感じた場所で奏でる男でもあった。

そこは、丁度文君の御簾の前だった。

「この音色は・・・なんて、胸に染みるの」
「姫様!？」

若桜は入るなり文君が涙を流していたので慌てた。

「無礼者! ！姫様の前で箏を弾こうなどと・・・」

「いいえ、違うの若桜」

文君は若桜の裾を掴んで必死にいった。

「どこの殿方が分かりませぬけれど素敵な音色でしたわ。
もしよければ、またここで奏でてくださいませんか」

それから毎夜、相如は奏でた。

あまりにも相如の箏が胸に染みたので文君は抑えきれなくなって御簾を払いのけた。

「相如様、私、貴方をお慕いしてもよろしいですか？」

「姫、宜しいのですか？私より相応しい方がおられるのでは・・・」

「いいえ、いいえ、相如様が良いのです」

「実は、前から姫の事をお慕いしていました。

しかし、私には過ぎた方と諦めていました。

「・・・私と宮中を抜け出してくださいますか？」

「・・・はい」

文君が姿を消してから、宮中は大騒ぎだった。

あちらこちら探すけれど、文君は見つからず
2年の月日が経った。

「お上、姫様から文を預かっておりました」

実は文君が若桜に文を残していた。

しばらくその文に目を通すと

ふと目を和ませた。

「若桜、文君のところへ衾と錢三万を送ってやれ」

「はい、有難うございます」

「・・・？何故お前が礼を言うのだ？」

「姫様の喜びは私の喜びですから」

(後書き)

話のまとまりがなくて本当すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036m/>

たったひとつ

2011年10月7日04時19分発行